

「抑止力」とされる米海兵隊は、何から何を守っている
浅野ゼミ沖縄基地問題で沖縄の学生と討論

同志社大学社会学部メディア学科・浅野健一ゼミの学生 18 人（学部 3・4 年生 14 人と院生 4 人）は、教育 GP の一環として 2010 年 6 月 12 日から 15 日まで沖縄合宿を行い、二つの大学で討論会を行った。14 日は琉球大学法文学部の我部政明ゼミ、15 日は沖縄国際大学の石川朋子講師（南島文化研究所研究員）のゼミ 1・2 期生との討論会だった。両校との討論会についてその概要を報告する。

また、討論会の他に 13 日は 11 時間の「沖縄の歴史と沖縄基地問題を知るツアー」に参加し、ガマなどの戦地跡や米軍基地、基地外住宅地を訪れた。また、伊波洋一・宜野湾市長にインタビューを行い、琉球新報や琉球放送・琉球朝日報道の見学、沖縄県マスコミ労協メンバーの新聞記者との交流会にも参加した。

今回、このような機会を与えてくれた教育 GP 関係者の方々に心より感謝したい。

1. 琉球大学我部政明ゼミとの討論

6 月 14 日(月)午後 16 時 30 分から 18 時 45 分まで、沖縄県西原町字千原 1 番地琉球大学法文学部棟 203 教室にて、琉球大学法文学部我部政明教授(国際政治学、日本外交史、日米関係論)のゼミと討論会を行った。浅野ゼミからは 14 名、我部ゼミからは我部教授と 11 名のゼミ生と同専攻の学生 2 名(いずれも 3・4 年生)が参加した。構内は広大であり、また普天間基地のヘリ飛行ルートであることから教室の窓が 2 重ガラスとなっていて、私たちは校舎に着いたときから基地の存在を肌で感じた。

討論会は和やかな雰囲気が始まり、まず我部教授から“抑止力”についてお話をいただいた。国際政治を学んでいるわけではない私たちにとっても大変わかりやすかった。よく語られることの多い“抑止力”の意味を本当に理解していたら、基地問題をめぐるこれまでの歴史も現在の混乱も、別のものになっていたのではないかと感じた。

続いて 3 年生が 2 年前の 1 年生のゼミで行った共同研究「沖縄返還密約とメディア」について 2010 年現在の状況も踏まえて発表を行った。今年度の共同研究「TV ドラマがつくる“歴史認識”」について報告した。次に、4 年生の共同研究「北東アジアについての日本のメディアの報道」の紹介とゼミの簡単な活動紹介も加えた。

続いて、我部ゼミの活動紹介に移り、「座学はほとんどなく、いつもどこかに出かけていく」というアクティブなゼミの活動を最近のインタビュー活動などの紹介も交えて報告があった。互いに学内を飛び出して活動していることを確認し、共感した。

我部ゼミの学生のほとんどは沖縄県出身者で、米軍基地問題や安全保障問題、日本の近代・現代史の歴史教育の問題が話題に上がる中で、沖縄の見方と本土の見方とを対比させながら意見交換をした。前半は、我部ゼミの学生から「近くに米軍基地があり、生まれた時から基地が当たり前のようにあった」「沖縄で取り上げられる米兵の犯罪に関するニュー

スは本土で大きく取り上げられないことが不思議だ」という声が上がった。浅野ゼミ側からは、「教育現場では、戦中について本土より歴史教育が重視されていると思っていた」という感想があった。沖縄と近畿に暮らす中で、互いに暮らしの中で感じてきたことを話した。

後半は、「沖縄の米軍基地は一体何から、何を守っているのか」「米海兵隊に抑止力はあるのか」などという議論が最後まで続き、前半とは違った、より集中した空気になった。終盤になると、沖縄に巨大な基地がある辛さをわかっており、米軍基地はあるべきではないと考えている一方で、「県外移設」という言葉にも、沖縄県内での「県内移設」という言葉にも、基地がすぐ近くにはない学生は大和人(やまとんちゅ)も沖縄人(うちなんちゅ)も「実際の辛さを想像するとひるんでしまう」という互いに似た感情が生まれることも話し合った。

予定の時間を超過するほど盛り上がった 2 時間を振り返ってみると、我部ゼミは、一人ひとりの意見の相違を当然として、一人ひとり率直に考えを述べて私たちに問いかけていた。しかしその率直な雰囲気は決して攻撃的という意味ではなく、沖縄らしいのびやかな雰囲気で、深刻な諸話題も等身大で語り合おうとするしなやかさがとても印象的だった。我部教授も終始議論を温かく見守って下さり、ゼミ運営も学生主体ということで、大変自由な雰囲気であった。

私たちを心から歓迎してくれた我部教授をはじめとして琉大の皆さんに大変感謝している。ぜひこれからも、今回生まれた学生同士のつながりを絶やさずに交流したいと強く感じている。

文責：3年生ゼミ長、山本美菜子

2. 沖縄国際大学 石川朋子ゼミ

6月15日午後零時半過ぎに宜野湾市の沖縄国際大学に到着した浅野ゼミ一行は、石川朋子講師の案内により5号館屋上から普天間基地を臨んだ。2004年の沖国大への米軍ヘリ墜落事件当時、現場に居合わせた石川講師から経験者としての思いなどを聞くとともに、完全装備の20人ほどの兵士が基地内の建物から飛び出してくる姿が見えたことで、基地がそばにあることの危険性を肌で感じた。その後1号館の教室に移り、午後1時から約一時間半、石川ゼミ(平和学)1・2期生と交流討論会を行った。浅野ゼミからは17名、石川ゼミからは石川講師と8名のゼミ学生(3・4年生)が参加した。はじめに、石川ゼミ1期生が研究「米軍基地による北谷町砂辺区への影響」の成果を発表した。沖縄戦で米軍が上陸した砂辺の戦前の歴史から、嘉手納飛行場が建設され、爆音による騒音被害が絶えないことが現地での調査や聞き取りなどで明らかにされた。基地周辺では米兵やその家族が住む基地外住宅が増えていることなども聞き、基地を抱える地域の問題を実感した。続いて2

期生から「宜野湾・沖国大へり墜落5年、石川・宮森小学校ジェット機墜落50年」を対象とした体験者からの聴き取り調査結果が報告された。事件の関係者の中には「近くに基地で働いている人がいるので、反対運動を大っぴらにできない」などの葛藤を抱えている人がいることを知った。米軍機墜落に関して、多くのメディアは「事故」と名付けているが、事故とは偶発的なものであるからこれは「事件」とであると結論付けた、と述べられていたことが印象に残った。

次に、石川ゼミの学生の要望により、浅野教授の講話が行われた。浅野教授は「日本の企業メディアは最も重要なことを取材・報道しない」と強調した。その後、浅野ゼミおよび16期生の共同研究「北東アジアの平和と日本メディア～朝鮮報道と権力の関係を中心に～」について報告を行った。研究目的や研究計画など研究概要の説明の後、本研究の核となる「ジャーナリズムの原理・原則」の紹介、社説や一般記事の分析方法に関して発表した。質疑応答では、浅野ゼミ生から、石川ゼミの報告書にあった「マスコミの取材は受けない。報道関係者に話すのと学生に話すのは全く違う」との体験者の声について質問がなされた。石川ゼミ生は「マスコミの取材では話した内容の一部しか伝えられないことがあると思う」と答え、石川講師は「メディアに出ることで『すごいね』などと、違う評価がついてくることへの戸惑いがあるようだ」とコメントした。また、浅野ゼミの研究内容に対して、石川ゼミで韓国への留学経験のある学生からの「韓国に対する報道を対象にはしないのか。韓国の情報が日本に受け入れられている状況は逆に朝鮮と対比するのはどうか」という提案の視点が新鮮だった。一方、浅野ゼミ生の「本土メディアによる沖縄の米軍基地の抑止力論をどう思うのか。また朝鮮や中国の脅威は本当にあると思うか」との質問に対して、石川ゼミの学生は「もし抑止力があるとしても、沖縄にこんなに基地は要らない。経済関係がなりたっているのに戦争するかは疑問だ」との声や、「抑止力は無い。海兵隊は攻撃するための部隊であり、何かされた時にまず動くのは空軍だ。もし抑止力というなら沖縄からイラクなどに派兵されている際、兵の補充を政府が求めなければならないが、していないのは抑止力ではない証拠だ」「沖縄でも抑止力だとの認識をもっている人がいるので難しい面もある」などの意見が出た。

平和学を学ぶ石川ゼミの学生たちは、基地問題に関して研究などを通して考えを深めていて、それぞれが当事者としてこの問題に向き合っていることを実感した。意見交換をすることで、彼らが体験者から感じ取った想いや基地が人々にもたらす被害を詳しく知るとともに、メディアを学ぶ浅野ゼミの学生にとってマスコミの取材の抱える問題について考える契機となった。今回の石川ゼミとの交流から多くの刺激を受けることができ、討論会から得た視点を今後の研究活動に生かしていきたい。

ゼミ生の感想—沖縄討論会を終えて

討論会に参加した学生から感想を集めたので、一部抜粋して掲載する。

[とても充実した4日間でした。なぜ沖縄の人の常識が耳に入っていないのかということや、沖縄にいる間だけでよく目にする「沖縄差別」という言葉について、さらに考えることが必要だと思っています。]

今回の様々な交流を通して自分がいかに、日米の安全保障条約維持が平和の維持であるという考えにとらわれていたのかに気付いた。我部政明教授の著作に「これまで常識とされてきたことを疑ってみる」という言葉があったが、それが実現できたように思う。

沖縄の大学生との交流会では、学生たちの意識の高さや、素直な思いが心に響いた。今回の合宿で、安全保障や基地の問題は「わからない」と議論を避けがちであった自分自身を反省した。沖縄での出会いは、私の止まっていた思考を開始させるきっかけをたくさんくれた。このような機会を与えてくれた教育GPに、私たちを温かく受け入れてくれた沖縄の人々に心から感謝したい。]

[今回の教育GPで訪れた沖縄は特にバスツアーで受けた平和学習は韓国人留学生である私には大きなショックを与えました。韓国で中学・高校を出て、韓国人として朝鮮戦争で日本の植民地にされたことや、太平洋戦争で朝鮮人が日本の戦争のために強制的に徴兵されたことなど、戦争において加害者としての日本しか知らなかった私に、沖縄戦争で犠牲になった沖縄の人々の生々しい実話は私の気持ちを複雑にさせました。沖縄戦争の話は歴史の時間に学んだ朝鮮戦争の話と似すぎていて心が痛かったです。]

[今回教育GPで沖縄に行ってきたたくさんの驚きがあった。特に驚いたのは平和についての考え方である。私達はどこか戦争を遠い昔の事として考えがちであるのに対し、沖縄の方々の中では戦争はまだ続いているという認識であった。その戦争についての認識は学校などで特別な教育を受けて知りえたものではなく、戦争経験者の祖父や祖母の話を聞き、至る所に残る傷跡を見て知りえたという。これは受動的ではなく能動的である故に知りえることの出来る情報である。彼らの知りたいという姿勢を目の当たりにして、今までの自分自身の姿勢について考え直した。こうしてきちんと考えるチャンスを与えられたことにすごく感謝しているし、これからの学びに活かして生きたいと思う。]

[沖縄から帰ってきてもなかなか頭の整理が付きません。これまで沖縄が背負ってきた惨禍と今も続いている構造的暴力の現実を一举に突きつけられて、私のノートには一言も聞き逃さないよう殴り書きにされた文字が残っています。しかし、傍観者から当事者への本当の一步をようやく踏み出せたのかもしれない。今回の教育GP沖縄合宿では座学では決して学ぶことのできないことを体験しました。

沖縄市内を走るタクシーに乗車した際には、運転手の中に沖縄戦を体験した方が非常に

多いことに驚きました。沖縄戦というものが住民の方々を巻き込んだ戦争であったと強く感じたのと同時に、今回聞いた一人一人で異なる戦争体験を可能な限り、まだ知らない人、そして次の世代に広めていかなければならないという責任も感じました。]

[今回の合宿は非常に充実した4日間だった。この4日間を通して、私たちは基地問題に関し、現地の人々の想いや生の声を聴いたことで、普段の報道からは見えてこない部分や問題点に気づくことができたと共に、改めて考えさせられることも多かったように思う。また、県民が一つになって現状を変えよう、解決に向けて努力しようとする姿勢は何より印象的で、沖縄の各メディアの方々や学生らを通して学ぶべきことは大いにあった。今後は、これらの学びや経験を、研究に活かしていくと共に、その他の場所（ゼミ以外）においても私たちなりにどう還元していけるか、それらについても考えていきたい。]

[実に充実した3日間だった。水着を持たず沖縄へ行くなど今回が最初で最後であろうが、これほど内容が濃く、多くを学べる旅も今回限りだろう。

1日遅れて参加した私は、沖縄に着いて初めに塩平権現洞へ向かった。濡れた地面に滑りそうになりながらもなんとか内部へと進むと、道々に残っている皿やビンから、戦時中の生活ぶりが本当によく伝わってきて、必死に生きていたのだと心底感じられた。

翌日は琉球新報の見学へ向かった。政治部部長の松元記者に話を伺い、沖縄の基地問題についてあらためて考えさせられた。私は普段、在京メディアにしか触れる機会がなく、基地問題とは鳩山政権からの約1年間に起こった問題のように感じていた。しかし、沖縄の新聞では基地問題・平和問題を取り上げない日はないという話を聞いて、自分の身勝手さに呆れてしまった。ヘリ墜落事件の時の映像を再び見せていただいたが、「本当にここは日本なのか」と思われる。自分の国でありながら米軍に封鎖され、現場に立ち入ることもできない地域があるなど、本当に信じられない。沖縄の人たちにとって、戦争はまだ終わっていないし、基地があるために日々脅威にさらされているのだ、とあらためて感じた。

その後、琉球大学との討論会を行った。一昨年の研究テーマ「沖縄返還密約とメディア」について話したあと、主に基地について互いの意見を交換した。夜は琉球大学の学生と我部先生に混じって食事をしたが、我部先生が言った言葉の中に忘れられない言葉がある。「沖縄のメディアは歪んでいるっていう人がいるけど、現実が歪んでいるのに、その現実を伝えるメディアが歪むのは当たり前じゃないか」。沖縄の実態がすべてこの一言に集約されているような気がして、言葉が出なかった。しかし、沖縄を理解しきれていない未熟な私にも琉球大学の人たちはとても親切にしてくれたので、この夜はとても楽しかった。

最終日は、沖縄国際大学に向かい、屋上から初めて普天間基地を見たが、これは何だと思った。想像以上に広大で、ショックだった。基地のそばにまで住宅地を作らねばならないほど、沖縄には土地がないのだ。いや、“あるのにない”のだ。鳩山元首相は、この基地を見て何を思ったのだろうか。菅総理は、何を思って合意を承認したのだろうか。この土

地を日本に返せと思わなかったのか。日本の弱さを感じ、また悲しくなってしまった。石原先生が「安保をなくしたら、日米関係が悪化するとは限らない。関係を悪化させずに条約を改定する道はあるはずなのに、なぜ一生懸命考えないのか。基地を作ることに必死になるのではなく、なくすことに頭を使えばいいのに。戦争ありきではなく、平和ありきに考えたい」と話していたが、本当にそのとおりだと思う。

本当に毎日が学びの連続だった。頭がいっぱいになって、自分の未熟さ、身勝手さに呆れ、日々を消化することに必死な3日間だった。情けなくて涙が出たり、すごく落ち込んだりしたが、一生忘れない経験をしたと思う。菅政権に変わって本土では基地問題は収束に向かおうとしている気配が見られるが、ここで終わらせてはいけないと強く思う。3日間で学んだことを頭に置いて、もう一度基地問題について考えてみたい。]

[「沖縄の心の重層性」を最も感じた。沖縄に着いてから飛び立つまでの全てのことが鮮明に蘇る。沖縄の怒りも優しさも、直接触れたことがなかったので、いままで自分が沖縄を一面的に見てきたことを実感した。そこに暮らす人々の視点に立って感じることは容易いことではないが、戦争の歴史も基地問題も安全保障の問題も、そこに暮らす人の気持ちに分らなければ絶対に本質は見えてこない。改めてそう感じた。

ガマに入った時も、沖縄国際大の黒こげの木と基地を目の当たりにした時も、米須海岸で立ちすくんだ時も、そして琉大の学生と交流した時も同じように思った。

それから我部教授の話は、国際政治を学んでいるわけではない私たちにとっても大変わかりやすかった。語られることの多い“抑止力”の意味を本当に理解していたら、基地問題をめぐるこれまでの歴史も現在の混乱も、別のものになっていたのではないかと感じた。次に沖縄に行くまでに、自分をもっと成長できるよう、ジャーナリズムを学ぶ学生として残りの学生生活を大切にしようと思う。]

[私は、6月13日から15日の4日間、沖縄県に滞在した。生まれて初めて行った沖縄の第一印象は、空が広いことだった。その綺麗な空に、沖縄では米軍の戦闘機が飛んでいるという。知ってはいたが、実際に目にすると、俄かには信じがたいことだった。もちろん、それはその後、「事実」として覆された。メディアの情報に頼るよりも、「論より証拠」、自分の見聞の方が、基地の状況をより感じ取ることができるのは、確かだった。

琉球新報の松元記者から、米軍戦闘機の存在がどれほど沖縄の人に被害を与えているかを説明していただいた。中でも例えば、米軍基地は、北部に固まっている。騒音のため、不眠・体調不良に苛まれる人が特に多いという。松元剛記者はある取材で、結婚後まもなく、基地周辺に引っ越してきた南部出身の女性が、その騒音に参ってしまい心身ともに害してしまったということを聞いた。そのお子さんが最初に覚えた言葉は、その女性が日々発していた言葉、「こわい」だったという。

13日の討論会で琉球大学のある学生は、戦闘機の騒音が生まれたときからあったため、普段の生活の中で慣れてしまっていることが恐ろしいと、話していた。大学の近くを米軍の戦闘機が通ることもあるとも話していて、窓から見えるらしい。大学の窓は二重窓だった。

14日には、米軍ヘリ墜落事件が起こった沖縄国際大学を訪れた。損壊や火災が起きた棟は、新しいものに建て替えられていた。正門近くに、黒く焦げている樹が残されていて、墜落時の被害を物語っていた。大学の屋上から、普天間基地が一望できる。基地はフェンスに囲まれ、緑に覆われていて、街と遮断されているかのように見える。しかし、空に境界はないし、道路は基地内外へ繋がっていた。基地内にはコンクリートの建物が並び、道路や滑走路が設けられ、戦闘機やジープが並べられている。目の前に広がっている米軍基地の存在そのものが私を、ゾッとさせた。

5年前、いや1年前の状況と、全く異なり、時事一刻と変化していく、それが沖縄の基地問題だと平和ガイドの方が話していた。現在、普天間移設について、民主党が民意に反しながら国会で議論をしている。沖縄には、温かい人々、美しい自然は共生している。「安全保障」を守るために、沖縄にのみ様々な犠牲を強いる。そこまでして、なぜ米軍基地が必要なのだろうか。それを、沖縄から帰った後も、ひしひしと感じる。

安全、すなわち平和は、基地や武器によってではなく、話し合った上での相互理解によってでしか成り立たないと私は考えている。どうすれば、それが沖縄で、日本で、そして世界で浸透できるのか分からない。ただ、今以上のことが悪化しないように歯止めをかけ、基地をなくしていく努力をするのは、可能だと思う。私は、その方法を今後考えていきたいと思う。]

(以上)